研究

佐伯市戦後五十年史(二)
―昭和三十年代の社会・文化・スポーツ―

矢野彌生
（会員　佐伯市中山区）

〈前号〉
一一　出納市政と産業・都市基盤の整備（続）
(四)中芳島・須留木の区画整理事業　(五)小田頭首工・木立防災ダムの建設　(六)し尿処理場の建設　(七)上水道の普及

一二　昭和三十年代の社会・文化・スポーツ
(一)　労働問題
昭和三十年代　〈佐伯市内のおもな労働争議〉　昭和三の労働争議　十年代は経済の回復から高度成長期に入ったが、佐伯地区でも公害問題や労働問題が続出した。以下、佐伯市内でおこった労働争議の概要を述べてみたい。

○昭和三十二年
この年は佐伯地区でいろいろの問題が発生。本田造船所の十二人の解雇問題は、解雇撤回配置転換で解決。

佐伯勉強堂美術製版労組の労働協約締結争議は、半日ストを実施したが、早期妥結で解決。臼杵鉄工佐伯造船所の下請を行なっている葵産業の不当労働行為事件は、地労委により解決したが、翌年には、組合は解雇を認め、関連企業の都産業は、企業を閉鎖し、組合も消滅した。

小中学校教員の大量整理問題。県下で問題になったのは、小中学校教員三百七十人の首切り問題であった。

反対運動を行なった県教組は、三月二十九日、県教委の妥協案を受け入れ、退職意志表示者約百五十人の退職届を県教委に提出して解決。

○昭和三十三年

教員の勤評闘争。昭和三十一年愛媛県から始まった勤務評定に対し、日教組は全国の組織をあげて反対に立ちあがった。県教組も早退戦術など反対闘争を行なったが、三十三年になり、勤務評定は結局実施されることになった。

興国人絹パルプ争議。この争議は、不況の波をまともに受けて六億円の赤字を出した会社が、経営合理化のため、組合に千四百十三人の人員整理を通告したことにはじまる。

佐伯工場でも組合員六百二人の約三分の一を整理するものだった。組合は、整理案の撤回と昇給加算の実施を要求して無期限全面スト(約五百人)を約二十日間行なったが、七月十八日、社員二十六人、労務者六十五人が解雇された。昇給については十二月十七日、中労委の調停案を会社、組合も受諾し、解決。

争議相ぐ。**佐伯貨物労組**は、組合の結成から三ヵ月もしないうち、組合員二十一人が解雇された。組合は反対闘争を行なったが、四月十一日、事業縮小を認めて組合を解散した。

また、**二平合板労組**も、七月末、五十三人の整理を通告され、白紙撤回を要求して争ったが、十二人の撤回を認めさせたのみで、四十一人が整理された。

同じ七月に、中島鉱山の**新木浦鉱業所**が事業所の閉鎖で、六十四人の全従業員を解雇した。

○昭和三十六年

タクシー争議。七月九日に**南海タクシー**(組合員二十四人)、十一月に**佐伯中央タクシー**(二十三人)、十二日に**佐伯タクシー**(二十四人)が結成された。ただちに佐伯地区タクシー労組協議会を組織した。そして、十五日に各組合は、いっせいに夏季手当一律一万八千円を要求した。一時は八千円でまとまりそうであったが、組合側が拒否してストを長期化しかけた。それぞれ八千円プラス二千円で妥結した。だが、組合そのものは、**中央タクシー**は翌年三月、**佐伯タクシー**は三十九年に解散してしまった。

○昭和三十七年

興人労組の分裂。興人労組は結成以来何度かストを行なったが、最大規模のものは、なんといっても、三十七年のストだった。

このストの発端は、春闘で平均八千八百四十円の賃上げを要求したのに対し、会社が千二百二十四円の回答をしたことについての不満であった。そこで興人佐伯支部(組合員六百五十二人)は、五波にわたり二十四時間ストを行なったあと、五月十八日、中央本部の指令にしたがって無期限ストに突入した。

32日ぶり全員就労

興人佐伯争議一応落ち着く

小児マヒ

生ワク、定期服用に

研究協議会で結論

32日ぶり全員就労・興人佐伯工場
(昭和37年6月19日の大分合同新聞)

ストが長引くにつれて、組合員の主婦約百人が組合事務所及び会社事務所を訪れ、スト解決を申し入れた。これにつれて、六月六日批判派の組合員百七十人が執行部に対して総辞職を要求。工場との係争は賃上げのほか、操業日数、工場案一ヵ月二十九日と組合の主張二十六日の問題があり、主婦や組合員の約半数は二十九日で妥協することを望んでいた。

ロックアウト通告

争議中の興人佐伯工場

15日からものみの塔

聖書冊子協大分大会

処女列車が通過

教育1令庄間

ロックアウト通告・争議中の興人佐伯工場
(昭和37年6月9日の大分合同新聞)

こうした折、会社は九日組合に対し、作業閉鎖、つまりロックアウトを通告してきた。ついに、十一日批判派は新しく興国人絹パルプ佐伯労働組合を結成し、この第二組合が、十二日、第一組合のピケを破り、二十五日ぶりに操業を開始した。

そこで、佐伯支部は、地労委に提訴した。六月十六日、地労委あっせんが成立し、争議は解決した。

興人佐伯労組が分裂

批判派が新組合を結成

ヨット・ハーバー

別府　きょう打

興人佐伯労組が分裂
（昭和37年６月12日の大分合同新聞）

○昭和三十八年

佐伯地区労・労信販を創立。この年は、佐伯勉強堂・二平合板・臼杵鉄工佐伯造船所の解雇問題、失対法改正反対の全日自治労の団体交渉、大分合同銀行労組の分裂問題等があった。

九月二十九日、佐伯地区労働者信用販売生活協同組合（労信販）の創立総会が開かれた。そして加盟二十七組合、四千五百人の組合員が一口千円の出資をした。

○昭和三十九年

国労大分地本の分裂。県労評を脱退した国労大分地本は、民社党支持と同盟指向を正式に決定したことにより、国労本部より処分を受けた。処分を受けた甲斐委員長は、新国鉄大分労働組合（新国労）を結成し、国労との組織拡大を目指す争いが行なわれるようになった（以上は『佐伯市史』の記述を要約したものである）。

(二) 白潟遺跡の発見

白潟遺跡の発掘　〈造林中に貝塚を発見〉　敗戦後間もない昭和二十三年に下城遺跡が発掘されてから九年目、昭和三十二年二月に今度は城山西麓の台地に造林中に貝塚を発見した。当時の新聞報道では次のように伝えている。

佐伯市鶴岡地区白潟部落若宮八幡社付近の山麓に古代原住民あとの貝塚古墳があるのを、山野造林に出かけた同地区の竜護寺部落の米沢惣吉さん(六六)と、野口部落の古谷徳蔵さん(六四)が二十三日発見した。同所が白潟という部落の名称からして往時は佐伯湾の入江の海辺であったことは、部落に井戸を掘ると砂地があらわれることからも明らかであったが、こんど発見された古墳からも貝ガラが発見されたほか、弥生式土器などの破片や、住居跡の石がけ、カマドにつかったと思われる焼石なども発見されており、同地方の古代文化研究に貴重な資料となるものとみられている。

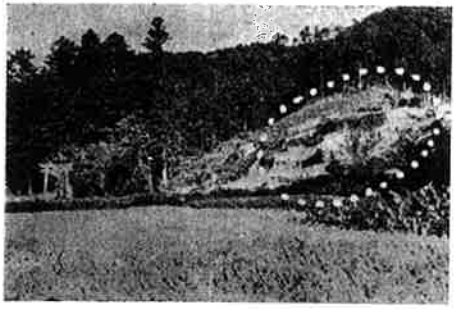
佐伯市では別府女子大助教授賀川光夫氏を招いて近く発掘調査を行うことになった。なお調査までは原型を壊すおそれがあるので一般の乱掘をしないように望まれている(『大分合同新聞』昭和三十二年二月二十五日版)。

〈二つの貝塚と住居跡の発見〉　昭和三十三年三月二十五日、県指定史跡になった白潟遺跡についてその概要を紹介しよう。

白潟遺跡は、城山の西山麓にある若宮八幡宮横の丘陵にある二つの貝塚と台地上の住居跡からなる。

この小丘は標高十八メートル、背後は山の急傾斜となっているが、昭和三十二年児童公園造作工事の際、白潟台地周縁の土取中夥(おびただ)しい貝類とともに素焼の土器類が発見されたことに端を発し、賀川光夫教授・小田富士雄両氏の下に発掘調査が行なわれた。

その結果、弥生中



点線内が発掘現場
(『佐伯市報』昭和32年11月1日号)

期竪穴住居跡、土師器を出土する高床式家屋跡（平安時代）、蔵骨器、火葬墓、弥生式土器（下城式土器と汎称される甕形土器、遠賀川系の壷形土器等）、そして磨製石鏃、石包丁、砥石、獣骨、貝類、魚類の骨等多数の遺物が出土した。

この台地は二千年余前の弥生時代から奈良・平安時代に至るまで、古代人の活動の場であったことがうかがわれる。とりわけ本調査を通じて、下城式土器が東九州に特有な地方色を有するものとして分類・編集されたのは特筆すべきことである。

白潟遺跡は、弥生人の住居に最適な自然環境であり、当時の汀線を考え、海進状況を想定するのに格好な遺跡でもある。

また、本遺跡の貝塚は、下城や長良貝塚と同じく弥生前・中期に類別されるが、須恵器は奈良・平安時代に属するもので、火葬墓はこの地方に拠った佐伯氏以前の豪族の墓地の可能性もある（『佐伯市の文化財』佐伯市教育委員会　平成二年）。

発見された納骨ツボ
（『大分合同新聞』昭和32年６月29日版）

〈二〇〇〇年前の白潟人の生活と環境〉　白潟遺跡から発掘された貝塚や住居跡などから、当時の白潟人の生活状況や環境について、二・三の資料[7]をもとに推測される事柄を少し考えてみたい。

番匠川の川口付近はおそらく現在より深く湾入しており、特に耕作に適した低湿地は少なく、これだけでは白潟の人々は生活はできなかったであろう（石包丁が出土していることから農耕があったことが分かる）。

住居地上層から、炭化物では、イチ

弥生式竪穴住居を復元
（『佐伯市の文化財』・平成２年）

イガシ(種子は食べられる)・ウバメガシ(多少苦味はあるが食べられる。また、海岸に多い)・アカガシ・アラカシ・コナラ、貝塚からはシラカシ・イチイガシが多く検出されている。

このような自然遺物の考察から、弥生前期から後期にかけて、一帯は深い昭葉樹林(常緑広葉樹を主とする樹林)が繁り、秋には豊かなドングリを採集して食糧とすることができた。

住居地帯から干潟が近く、そこで豊富な貝が採取されて、重要な食糧源となった。また、長さ三〇～四〇センチ程度のマダイも発見されており、刳舟や釣針を使用して佐伯湾に出漁したのではないかと思われる。しかし、魚骨以外それを裏つける資料はない。

イノシシやシカも多く、この捕獲には磨製の石鏃が使用されたとみられる。

白潟人が住んだ家は、粘土層を掘り下げた(長軸七・五メートル、短軸五メートルの長円で、平地より三〇センチ掘り下げられ、柱穴四と炉跡発見)素朴なものであった。

また、白潟遺跡からは鉄の滓が出土しており、これは佐伯地方には当時鉄生産の集団があったことをうかがわせるものである(下城遺跡に鉄生産の工房が発見されており、長良貝塚からも鉄鎌も出土している)。

櫛目紋土器の発見で、それが瀬戸内、東九州に広く分布する弥生後期文化の一特徴であることから、広い範囲の関連で検討する必要がある。すなわち、白潟遺跡も広く、他地域の文化の影響があったにちがいないと推測される。

櫛目紋土器
(発掘復元された土器・
『佐伯市報』昭和32年11月1日号)

(三) 主要文化団体の活動

昭和三十年代の文化活動　昭和二十年代に創設された主な文化団体をあげると、佐伯合同短歌会・木馬の会・佐伯市美術団体の佐伯美術会・木曜会、佐伯美術家協会などがあげられる。さらに、三十年代には、佐伯なかまコーラス(三十年)・佐伯詩道会(三十九年)・穂山会

（三十七年）・佐伯史談会（三十三年）などが発足している。

〈佐伯合同短歌会〉　佐伯合同短歌会は昭和三十年代も継続して、毎年のように精力的に歌集を発刊している。歌集名と発刊年をあげると次のとおりである。

・栂牟礼（昭和三十年）　・番匠（昭和三十一年）
・釈魔嶺（昭和三十二年）　・鶴見崎（昭和三十三年）
・神の井（昭和三十四年）　・豊後水道（昭和三十五年）
・彦嶽（昭和三十六年）　・龍渓（昭和三十七年）
・八島（昭和三十八年）　・白潟（昭和三十九年）

（『宗太郎』による）

〈佐伯なかまコーラス〉　昭和三十年創設された「みんなでうたう会」を三十三年に改称したもの。会長小野章。

〈佐伯史談会〉　昭和三十三年、鶴岡地区の郷土史同好者、泉由蔵・広瀬武夫らによって創設された鶴岡郷土史研究会と、同じころ佐伯市内の柴田勝実・土屋直己らによってはじめられた佐伯史談会が母体で、しばらく二本建で運営され、鶴岡郷土史研究会が機関誌『郷土史研究』を発刊した。

しかし、両会の経理は一本で鶴岡郷土史研究会が受け持ち、その上会員の重複が多く、異名同体の感があったので、昭和三十九年ごろ自然的に統合、強化して佐伯史談会として発足した。

いま、佐伯地方の郷土史研究の経過をみると、明治三十五年（一九〇二）、雑誌『豊国史談』に拠った佐藤蔵太郎（鶴谷）が創立した豊国史談会（当時大分町）の伝統をひくもので、大正元年（一九一二）、郷土佐伯町に帰ってきた鶴谷は、中島丁の自宅に「豊国史談会」の看板をかけ、郷土史の研究とその編述に晩年を過したことに始まる。大亀忠らが「郷土史料研究会」の名のもとに「栂牟礼実録」など古写本の謄写印刷をしたのは昭和六年（一九三一）ごろであった（『佐伯市史』）。

〈詩吟〉　佐伯詩道会は昭和三十九年発会、淡窓伝光霊流の吟詠を研修している。会長岩崎陽二。穂山会は昭和三十七年、関西詩吟同好会の清水穂山会によって創設、関西詩吟同好会穂山会と称している。会長清水正信（穂山）。

〈佐伯なかまコーラス〉　昭和三十年に創設された「みんなでうたう会」を同三十三年に改称したもの。会長小

野章（以上『佐伯市史』）。

（佐伯市美術協会）　戦後の昭和二十二年十一月に発足した佐伯美術会は、昭和三十六年五月に佐伯美術会と佐伯美術家協会の統合により、佐伯市美術協として新発足している。会長に菅一郎氏が就任している。[72]

【注】

(71)『白潟遺跡』（佐伯市教育委員会　昭和三十三年）・『佐伯市報』（佐伯市　昭和三十二年十一月一日号）・『佐伯市史』・『大分の歴史(1)』（大分合同新聞　昭和五十一年）などから引用した。

(72)『佐伯市美術公募展―第50回展記念誌』（佐伯市美術協会　平成八年）

堅田の古城趾

堅田には上城（かみじょう）・下城（しもじょう）の地名があり、宇山城趾がある。上城・下城は王朝時代からの佐伯の主都であるが、佐伯氏になってからも茲に住んでいたと考えられたが、栂牟礼築城が弘安八年前であるから、佐伯氏が最も長く、上城・下城に居たと仮定しても九十年位のもので、九代惟世（これつぐ）が大内勢と戦った嘉吉元年（一四四一）頃迄はその分家が住んでいたものと考える事が出来る。

上城一帯の地形を見ると、その背後に峻険な屏風の様な山を背い、当時その前面は海に臨み、丁度背後に鵯越（ひよどりごえ）を構えた一の谷と同じ地形で、佐伯氏も好んでこの地に居城を作ったものと考える事が出来る。

下城は昭和二十三年の発掘で一躍先住民族の遺跡として有名になったが、下城貝塚の貝層からは年代を追って支那・朝鮮から輸入の土器の破片が出て来た。この土器の破片から推して考えても下城には昔から相当の人が居住していた事は明らかである。

宇山城は上城・下城の出城と考えられ、其の地形から見ても、その大きさから考えても、本城のあったものとは思われない。宇山城の裏の岡の台から多くの土器が発掘されたが、長良貝塚と地続きであり、宇山城の外廓として居館があり、先住民族が住んで居た土地と出品から見て思われる。（増村隆也著・「佐伯雑記(一)」による）